

今日はお釈迦さまの誕生を祝う<sup>ごうたん え</sup>降誕会です。

お釈迦さまは「<sup>しょうろうびょうし</sup>生老病死」の苦しみを抱えている私たちに、多くの教えを残していただきました。人々は、それによって、苦しみを脱し、よき生き方を選んでいったのです。

お弟子さまたちを始め、お釈迦さまに出会い、自らの生き方を喜びに満ちたものにした人々は、心からの深い感謝の思いを<sup>いだ</sup>抱いたにちがいありません。

「お釈迦さまに出会うことができ、ほんとうによかった。お釈迦さまの教えを聞くことができ、ほんとうによかった。」

そのような思いが、お釈迦さまの誕生そのものを感謝する気持ちに広がっていったのは、想像に<sup>かた</sup>難くありません。

お釈迦さまの誕生は、さまざまな神話的表現に<sup>いろど</sup>彩られています。

お釈迦さまの生涯を伝える文学として名高いインドで<sup>あらわ</sup>著された『ブッダ・チャリタ』は、次のような描写をしています。

「<sup>おさなご</sup>幼子は、たちまちにして堂々たる七歩を踏み出したのであったが、その歩みは大地をしっかりと抑えては、正確に足を上げ、大地を砕かんばかりに進める一步は、とても広大なものである。

そしてこの<sup>しし</sup>獅子のたたずまいをなすものは四方を見渡して、『<sup>てんじょうてんげゆいが</sup>天上天下唯我<sup>どくそん</sup>独尊』と宣言した。

すると天から、月の光のように清らかな冷たいものと暖かいもの、ふたすじの雨が降り、彼の体にふれる幸せを得ようとばかりに、その美しい頭に注がれた……。」

生まれたばかりの幼子が、大地を砕かんばかりに歩いて、言葉を発したというのも考えにくいですし、冷たいさらに暖かいふたすじの雨が降りそそいだ、というのもなかったことでしょう。

しかしこれは、後世の仏教者たちが、お釈迦さま誕生への感謝の思いを、その誕生の場面を荘厳なものにすることで、表したものだと思います。

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

この思いは、お弟子さまや後世の仏教者たちだけではありません。二千五百年前のインドから、時間も空間も遠く離れた場所で生きる、私たちもまたお釈迦さまの教えにふれ、お釈迦さまの生き方に、力をいただいている一人です。

<sup>ごうたんえ</sup>降誕会は、「お釈迦さま、私たちに生きる力を与えて頂いてありがとうございます。そして、お生まれいただいて、本当にありがとうございます」という、感謝の心で迎えたいものです。

そのような思いを持って、<sup>たんじょうぶつ</sup>誕生仏を花で飾り、<sup>あまぢや</sup>甘茶を注ぎましょう。

— 終 —